

「日々の理科」(第2669号) 2021, 11, -3
「アナグリフ多摩川源流への旅(8)」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka



多摩川が作りだした青梅の扇状地の「扇頂」付近には、顕著な河岸段丘が見られる。多摩川本流の川原面を含めて3段、ところによっては4段になっている。これは過去にこのあたりの土地が隆起した証拠で、そのたびに流路が変更された結果、古い流路の痕跡(段丘崖)が残ったのだろう。このあたりは住宅化が進んでいるので、下位の段丘にも道路や家屋が見られる。



青梅市の市街地のすぐ南側の多摩川本流には、非常にきついカーブの蛇行が見られる。これほどの流量の川で、これだけの蛇行が残っているのは、半島状になった土地が浸食をまぬがれたからで、その部分に硬い岩石層があるのだろう。また、流路を人工的にまっすぐにする「捷水路」(しょうすいろ)の工事をしていないのは、氾濫や溢水の事故がなかったからだろう。



航空写真を見ても、この蛇行の「ヘアピン・カーブ」がよくわかる。この半島状の突出部は「釜の淵公園」という自然公園になっていて、東西2本の人道橋(吊り橋)で結ばれている。



これは西側の「柳淵橋」である。私は青梅市の友人とこの橋を渡って、公園を散策したことがある。川幅(河川敷)は意外にも広く、平常時の水量もわずかだ。



青梅市街地を過ぎて日向和田駅(ひなたわだえき)付近まで遡ると、多摩川本流はいよいよ「上流部」にさしかかり、右岸・左岸とも山が迫ってくる。